


 巻頭言

## 私の植物防疫・農薬との関わりと最近思うこと

全国農薬協同組合 理事長  
(山陽薬品株式会社 代表取締役会長)

おおもり  
大 森

しげる  
茂



この度、一般社団法人日本植物防疫協会（以下、日植防）の理事に、全国農薬協同組合（以下、全農薬）理事長という立場で選任いただきました。私自身、植物防疫の一端を担う農薬に関する仕事に従事したのは、今から39年前の昭和55年4月のことでした。

それまで学生時代は工学部で卒論のテーマは「目標計画法を使って事業の最適化を図ること」について、そして社会に出て5年間は医薬品の工場・生産部門で作業標準書作りや原価低減。そして、その当時導入されたGMP（製造所における製造管理、品質管理の基準）への対応業務などが主業で、まったく農業・農薬とは縁がありませんでした。

その後、農薬営業部門に異動、内勤業務半年、現場の技術普及担当を2年間経験後退社し、山陽薬品に入社しました。それまでの間、農薬については、レイチェルカーソンさんの『沈黙の春』（1962年）や有吉佐和子さんの『複合汚染』（1975年）を通して知ったぐらいです。

メーカーでの思い出は、昭和56年当時、岡山県児島湖において、魚毒性ランクがBsのPAP剤使用が原因でボラが浮いたというニュースを社内で小耳に挟む程度。現場においては、シクラメンの灰色カビ病防除のために使用した農薬で軸割れ症状が出た件で農家対応した件、海外からの進入害虫のイネミズゾウムシ対策での現地地薬効調査等が記憶に残っております。

また、当時は有人ヘリで農薬散布をしており、滋賀県内でその空散現場に立ち合ったことなども印象に残るひとつの思い出です。

日植防さんとのご縁は、メーカーにいた当時、ずぶの素人の私が農薬要覧の統計数字を基に、県別農薬出荷量などを会議資料に加工して活用させていただいたことがかわりの最初かと思えます。

その後、地元岡山県にもどり、農薬卸会社の社員として、当時、全農薬が日植防さんをお願いして代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター施設で開催していた植物防疫研修会を昭和58年に受講し、大変お世話になりました。

この業界で、約40年暮らしていると、いろいろなことを経験し、様々な話を耳にします。現在の農薬事情について理不尽に思うことは、

- ・現場では決められた使用方法であれば安全だと信じて販売していた製品が、経済的な理由とのことで突然販売を止めて登録失効とすること。
- ・ある農薬が疫学的な理由で安全性に懸念を持たれ、メ

ーカーの自主的判断でその農薬の販売を止めて在庫回収まですること。

- ・農薬登録をとらない、もしくは登録失効した成分のニセ農薬が、防除効果と安全性を謳い大手を振って流通しているのに行政的に何も対応できないこと。
- ・科学的な観点ではなく、政治的な判断で理不尽な規制が加えられたりすること。

このように、一時流行した「安全・安心」という言葉すら、時代遅れの感がする今日このごろですが、このように感じるのは私だけでしょうか。

私は、4年前になりますが、全農薬の安全協全国集会の特別講演をお願いした東京大学名誉教授の唐木英明先生に、反農薬を謳う団体のグリーンピースが唱える予防原則（怪しきは使わない）と農薬の関係をお聞きしました。唐木先生は、「農薬は各種試験を通して、定められた使用方法で安全性は担保されており、予防原則の前提条件である怪しいものではないので、問題ないですよ。」と即座に返答されました。

一方で、私が経験した現場での農薬に対するこれからの課題をいくつかあげると

1. 新たな再評価制度というハードルが加わり、生産現場としては栽培に必要な農薬が今後も確保できるかどうか。
  2. 農産物の国際間の流通を考える場合、残留基準値を国際的に統一することはできないのか。
  3. 消費者の安心感を高めるために、農薬を規制するだけでなく、農薬の販売だけでなく使用者の資格制度を考えてはどうか。
  4. 病虫害発生予測・診断に、AI的な発想・技術を現場レベルに持ち込める技術開発が早急にできないか。
- 等々、数えれば課題は沢山あります。

最後に、私は農業そして農産物こそ健康の大元であり、地域性も様々違う中で環境と共存し、後継者も含めて持続的な仕組み作りが必要な産業かと思っています。

今、日本は高齢化や人口減少という流れで、世界の中でもその最先端を経験している国として、その中で今後も持続的な農業生産を支えるために必要な団体の一つとして、一般社団法人日本植物防疫協会の果たす役割はますます重要なものになると思います。

私は理事として、日植防の発展のため貢献できるよう努力する所存です。

(日本植物防疫協会 理事)